

すといふことなし、天氣以急、地氣以明と尙書いふ、前文に辨するに同じきなり、又秋爲白藏と爾雅いふを、郭璞注曰、氣白而收藏とみえ、又素秋、素商、素節と元帝いふも、秋の別號なり、素字は白字とおなじく、玄ろしと訓すれば、もとづくところは、白藏といふによりしなるべし、此名目もあきらかなる義にして、明白などと熟字するも、この意にて、これら又一説なり、

〔日本書紀神代〕素戔鳴尊之爲行也、甚無狀、略○中、秋則放天班駒使伏田中、

〔萬葉集〕額田姬王作歌

金野乃美草刈、葺屋杼禮里之、兔道乃宮子能借五百礮所念、

〔倭名類聚抄歲時〕冬三月 冬 十月孟冬 十一月仲冬 十二月季冬

〔類聚名義抄五〕冬都農切

〔伊呂波字類抄天象〕冬フユ

〔八雲御抄三上〕冬 みふゆ 萬葉十七 みふゆづきはるはきたれど、梅のはたとよめり、みふゆはふゆをつきてはるといへるなり、こるつゆ、冬の名也

〔和爾雅二〕冬釋名云、冬終也、物終成也、貞冬 信冬 上冬 玄英郭璞云、氣黑而清英、靜順素、玄冬 盛冬 隆冬

三冬 九冬 嚴冬 大冬 陵冬 頑冬 寒冬 元冬 窮冬 安寧

〔釋名一〕天、冬終也、物終成也、

〔倭訓栞前編〕二十六、ふゆ 冬をいふ、冷の轉せる也、

〔古今要覽稿時令〕冬 冬はふゆなり、冬の訓義冷也、ひゆを轉じてふゆと云なり、是等は時氣によりて起りし訓なり、夏冬は時氣によりて、名義をあらはし、春秋は時物によりて、時名をなせし事

明かなり、さてふるくより、冬といふ語のみえしは、天の冬衣の神と古事記見えたれば、いとふるき語なり、此神の御名を以て考ふれば、冬衣といふ文字は、時節のうつり行、秋さり冬來りて、次第に